

卒業生・修了生調査

お茶の水女子大学・奈良女子大学



卒業生・修了生のライフコースと
国立女子大学の将来像に関する調査(概要)



お茶の水女子大学長からの メッセージ

お茶の水女子大学長 **本田 和子**

はじ

東西に設置された二つの国立女子大は、全国から向学心に富んだ女子学生を迎え入れ、共学大学とは異なる独自の教育環境を提供しつつ、今日までその歩みを続けてきました。国立大学法人化という歴史の転換点に立たされた現在、その教育成果を検証し、社会貢献の度合いを明確化することは、両女子大に課された説明責任として不可避の営みというべきでしょう。両者の協力により、卒業生のライフコースの追跡調査が実施されたのは、この責に応えるための試みの一つです。いま、ここにその成果が報告されます。このことを通じて、国立女子大の存在意義が明らかとなると同時に、これが、社会に対してより効果なメッセージとして機能することを切望致します。

学部卒業生調査

1. 調査時期 2000年 12月1日～28日
2. 調査方法 郵送による質問紙調査
3. 調査対象 昭和28年3月から平成12年3月までにお茶の水女子大学の学部を卒業した者（以下卒業生という）。

お茶の水
女子大学

学部 調査の内容

	総数	文教育			卒業年コーホート				
		文教育	理	家政・生活科学	1953-1960	1961-1970	1971-1980	1981-1990	1991-2000
卒業生数 (a)	17892	8658	4215	5019	1822	2789	3666	4164	5451
サンプル数 (b)	4500	2167	1059	1274	512	782	955	905	1346
有効回収数 (c)	3237	1510	738	974	423	595	702	669	810
抽出率 (b/a*100)	25.2	25.0	25.1	25.4	28.1	28.0	26.1	21.7	24.7
有効回収率 (c/b*100)	71.9	69.7	69.7	76.5	82.6	76.1	73.5	73.9	60.2
回答率 (c/a*100)	18.1	17.4	17.5	19.4	23.2	21.3	19.1	16.1	14.9

大学院修了生調査

1. 調査時期 2001年 1月12日～2月9日
2. 調査方法 郵送による質問紙調査
3. 調査対象 昭和38年4月にお茶の水女子大学大学院に入学し、平成12年3月までに修了・退学した者（以下修了生という）。博士後期課程入学者と修士課程（博士前期課程）修了者について、以下のよう調査対象を抽出した。
 - ①死亡・海外在住者・住所不明者を除いた。
 - ②博士課程入学者のうち、①で排除されなかった410名を全員対象とした。
 - ③全サンプル数2000から②の410名を除いた1590名を、修士課程修了者割り当て分とし、修了者名簿から無作為に抽出した。
 - ④その際、博士課程入学者との重複ケースを排除した。

大学院 調査の内容

	総数	M修了者	D入学者
卒業生数 (a)	4444	3852	592
サンプル数 (b)	2000	1590	410
有効回収数 (c)	1127	—	—

	総数	M修了者	D入学者
抽出率 (b/a*100)	45.0	41.3	69.3
有効回収率 (c/b*100)	56.4	—	—
回答率 (c/a*100)	25.4	—	—

奈良女子大学長からの メッセージ

奈良女子大学長 丹羽 雅子



お茶の水女子大学と奈良女子大学が新制大学として設置されてから五十有余年が過ぎ、両大学は、我が国に唯二つの国立女子大学として、女性に対し、高等教育の機会を提供し、有為な人材の養成に貢献してまいりました。この間、女性が社会の各層・各分野に進出するとともに法制度の整備も進み、近年に至り、男女共同参画社会の形成への取組も進められています。

一方、国立大学に対する厳しい構造改革が求められている現在、両女子大学が共同で実施した卒業生調査で得られた貴重なデータや御示唆は、大学の存在意義や将来像を探る上で大変有益なものであります。この調査をご発案くださいました前お茶の水女子大学長の佐藤 保先生並びに調査にご協力いただきました数多くの卒業生・修了生の皆様に深甚なる謝意を表し、ここにその調査結果の概略を公表します。

調査実施概要

奈良
女子大学

1. 調査対象（母集団）

昭和28年度～平成11年度学部卒業生 15,720名

昭和41年度～平成11年度大学院修了生（単位取得退学を含む。）2,308名のうち、
修士課程（博士前期課程）修了と博士後期課程修了の重複者484名を差し引いた1,819名

2. 抽出の枠

奈良女子大学同窓会編『佐保会会員名簿』（平成10年3月発行）及び各学部・学科・専攻・講座が作成している学部卒業生・大学院修了生名簿

3. 調査時期

2000年12月5日～2001年1月24日

4. 調査方法

郵送による質問紙調査

5. 標本抽出法

1) 学部卒業生に関しては、層化抽出法（層化の基準：学部）

2) 大学院修了生に関しては、全数

なお、学部卒業と大学院修了の重複者については、学部卒業生用と大学院修了生用の調査票が異なるため、重複者には2種類の調査票を発送してアンケートを依頼した。このことが、大学院修了生の回答率を低下させる主因となった。

回収状況

	発送数 ①	宛先不明 ②	配送数 ①－②	回収数 ③	回収率1 ③／①－②	回収率2 ③／①
学 部	3,314	113	3,201	2,214	69.2%	66.8%
大 学 院	1,819	93	1,726	1,048	60.7%	57.6%
計	5,133	206	4,927	3,262	66.2%	63.5%

	集計数 ④	集計率1 ④／①－②	集計率2 ④／①	未集計数 ③－④
学 部	2,197	68.6%	66.3%	17
大 学 院	1,038	60.1%	57.1%	10
計	3,235	65.7%	63.0%	27

調査結果の概要 I

— 学部卒業生調査 —

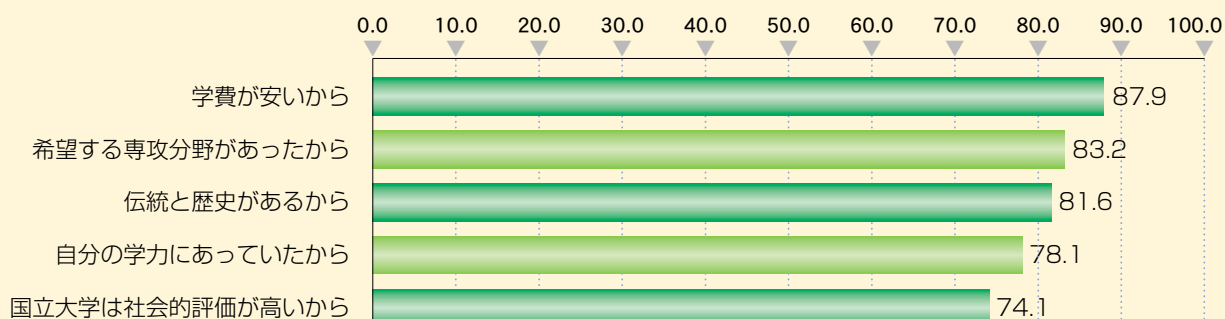
1 なぜ、受験したのか

お茶の水女子大学、奈良女子大学への入学動機

〔受験理由〕（「かなりあてはまる」「ややあてはまる」と回答した者の割合）

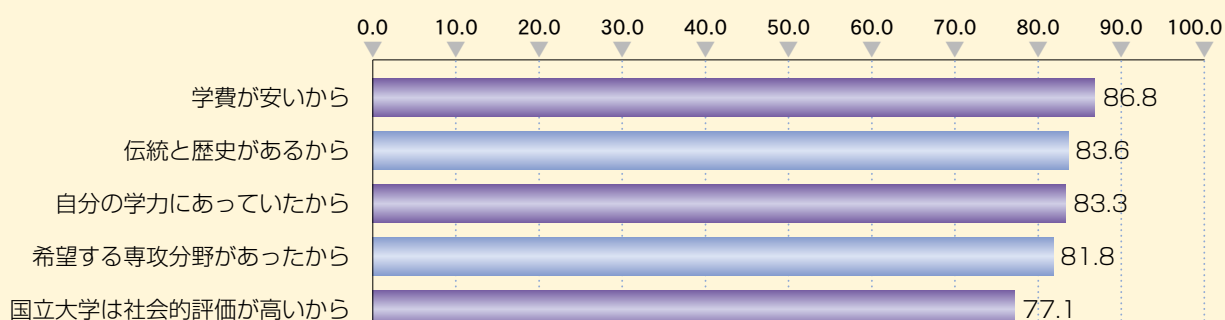
● お茶の水女子大学

（単位％）



● 奈良女子大学

（単位％）



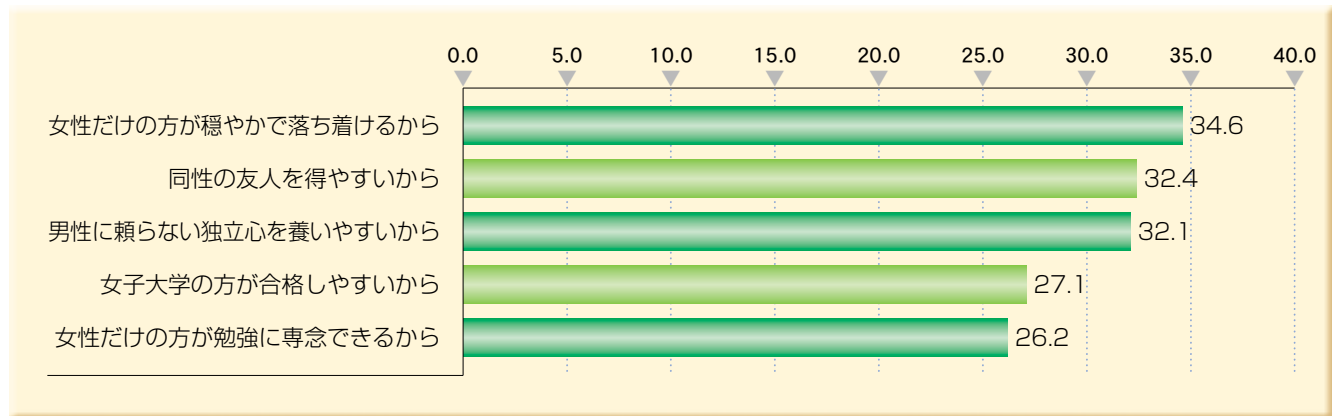
お茶の水女子大学、奈良女子大学を受験した理由として上位にくるのは、「学費が安い」「伝統と歴史がある」「希望する専攻分野があったから」「自分の学力にあったから」などである。若いコーホート（卒業年グループ）ほど「教職志望」や「国立女子大学だから」が減少し、「キャンパスの雰囲気」や「受験学力」、「大学院のある大学だから」が増加している。

「女子」大学の受験理由

〔女子大受験理由〕（「かなりあてはまる」「ややあてはまる」と回答した者の割合）

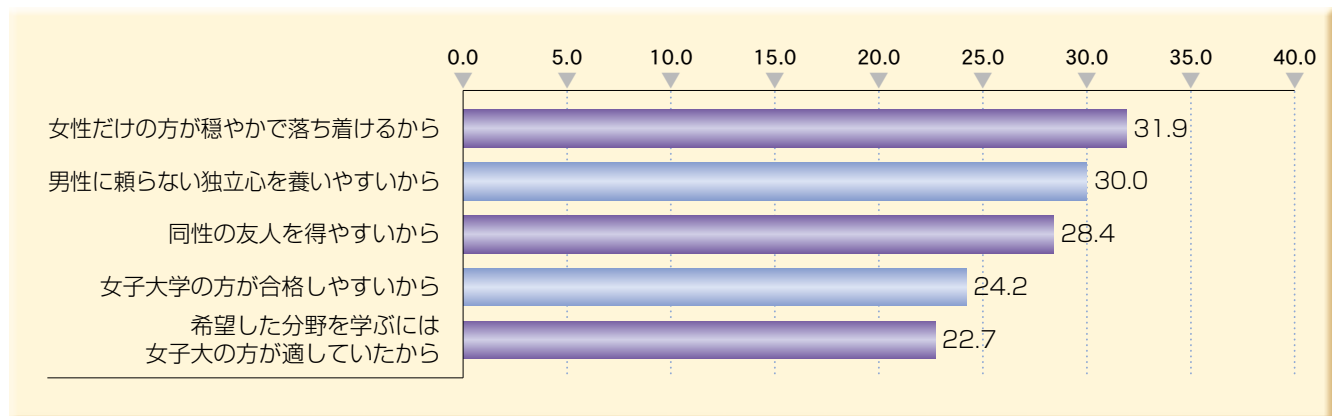
● お茶の水女子大学

（単位％）



● 奈良女子大学

（単位％）



調査結果の概要1／学部卒業生調査
1. なぜ受験したのか

「女子大」を受験した理由のベスト3は、「女性だけのほうが穏やかで落ち着けるから」、「同性の友人を得やすいから」、「男性に頼らない独立心を養いやすいから」である。年長コーホートにとって女子大は、共学への進学を許されなかった、次善の進学コースとしての性格が強かったが、若いコーホートではむしろ女性だけの大学環境が有するメリットを意識して受験する傾向が見られる。

【コメント】

卒業生の進学行動にみる国立女子大学の魅力要因として、「学費が安い」という経済的理由と、「希望する専攻分野がある」「伝統と歴史」という「高等教育機関」としての固有の魅力、「同性の友人」「独立心の養成」など女性だけという「別学教育機関」としてのメリットとがそれぞれ誘因力をもって働いていることがわかる。

「自分の学力」の範囲内で、少しでも偏差値の高い大学をめざすという受験生の進学行動の傾向が強いなかで、国立女子大学の受験理由として、「伝統と歴史がある」が多数を占めている事実は特記されてよい。大学の一つの戦略（戦略）は、大学としての個性、属性であるが、その一つが校風とか伝統といわれるものである。それも大学の序列と深い関係をもつが、同時にそれは大学が培ってきた長い伝統のうえに立っており、たやすく手に入れたり変えたりすることはできない。本調査の結果は、重要なのが「伝統と歴史」の再確認であり、同時に「専攻分野」の充実と個性という「新しい」伝統を培うことであることを示唆している。

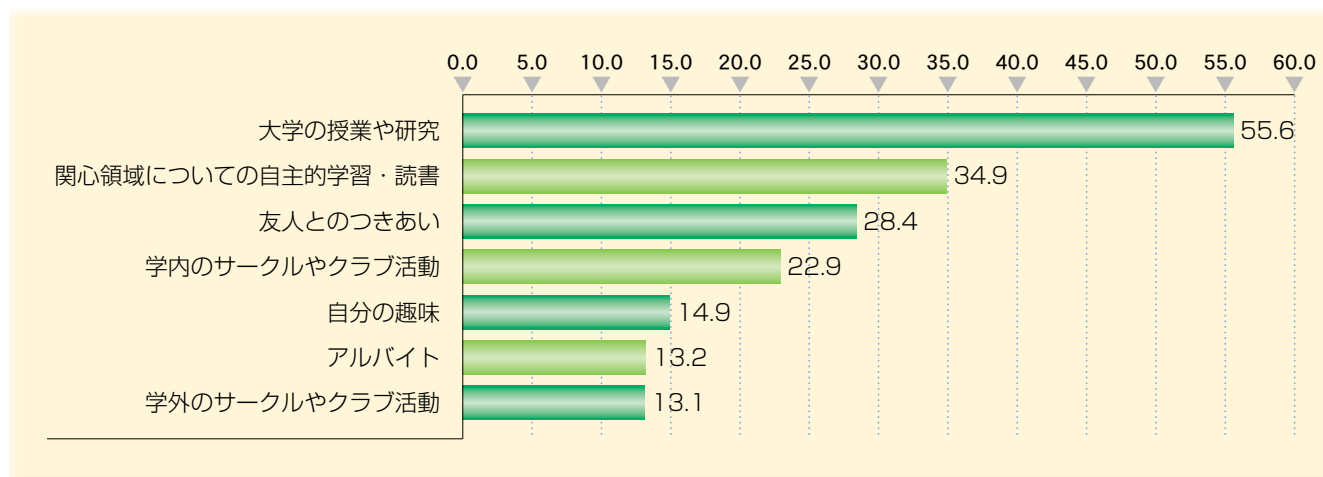
2 国立女子大学のカレッジ・インパクト

在学中に力を入れたこと

[在学中に力を入れたこと] (1位+2位、10%以上の項目)

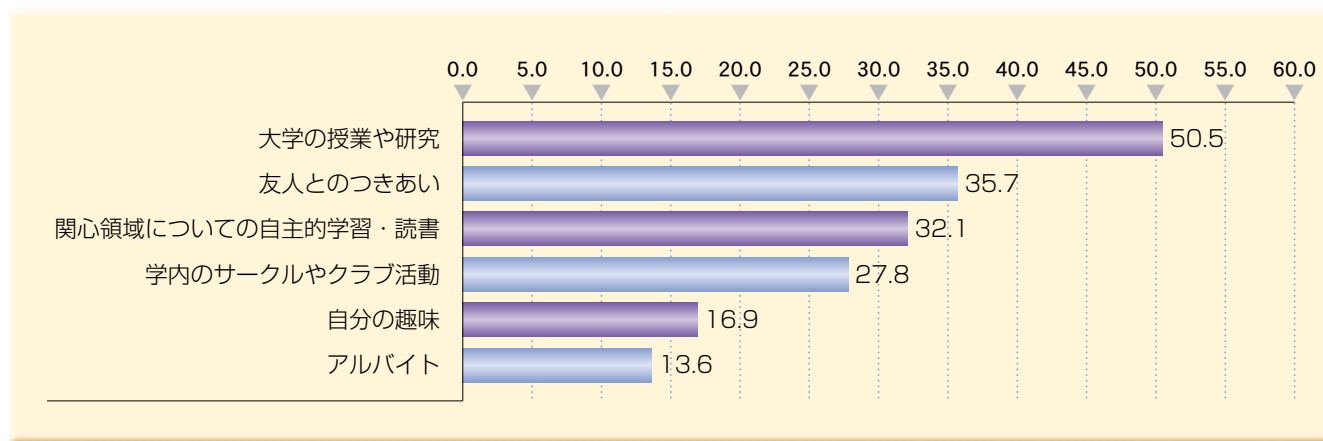
● お茶の水女子大学

(単位%)



● 奈良女子大学

(単位%)



在学中の生活において力を入れたものとして上位にあがっているのは、「大学の授業や研究」、「関心領域についての自主的学習・読書」、「友人とのつきあい」である。

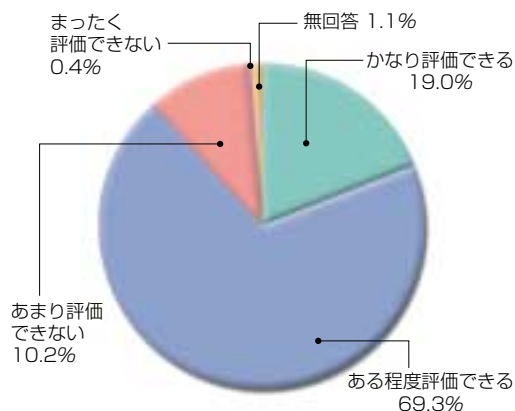
【コメント】

大学が卒業生に提供したものが、なによりも「学習ないし研究」環境としての特徴であり、以下、友人との交流やサークル・クラブ活動、趣味活動など、人間関係をつくり自己表現を試みる「人間形成」空間であったことがわかる。ただし、年長コーホートの「勉学集中」型から若年コーホートの「キャンパスライフ多彩」型への移行が読みとれる。それは、大学の守備範囲内にあったかつての学生とは異なる、大学の守備範囲外に流出してきた学生の増加を意味する。大学の守備範囲外に流出する学生の増加は、大学が、顕在的カリキュラム(公的カリキュラム)だけでなく、クラブ活動や課外活動、友人や教師との交流など、大学生活のさまざまな側面に埋め込まれた「隠れたカリキュラム」(学習されることが明示化されていないのに学習されていく教育内容)に敏感になることを要求している。教室で行われる授業やゼミは、大学が学生の教育に果たす役割の半面でしかない。これまでの大学の教育改革で見落とされているのは、「隠れたカリキュラム」の問題であり、それを改革の一部に積極的に位置づけていくことが必要とされている。

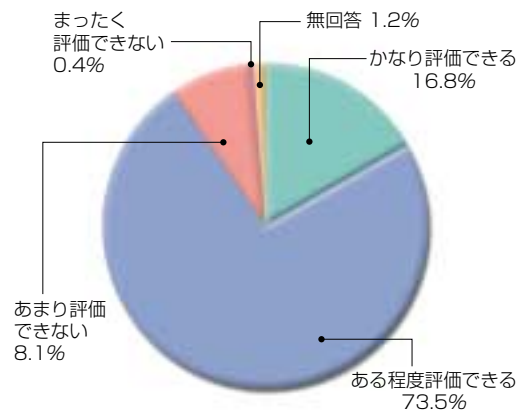
大学生生活の評価

[総合的に見て…大学生生活の評価]

● お茶の水女子大学



● 奈良女子大学



[大学生生活の評価] (1位+2位)

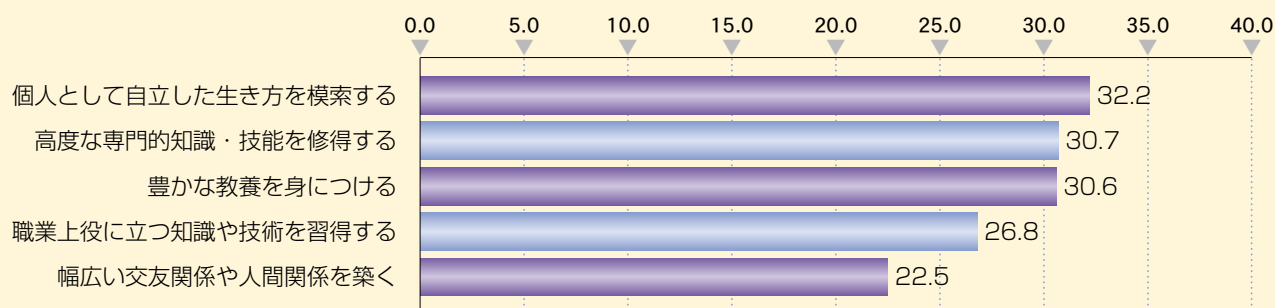
● お茶の水女子大学

(単位%)



● 奈良女子大学

(単位%)



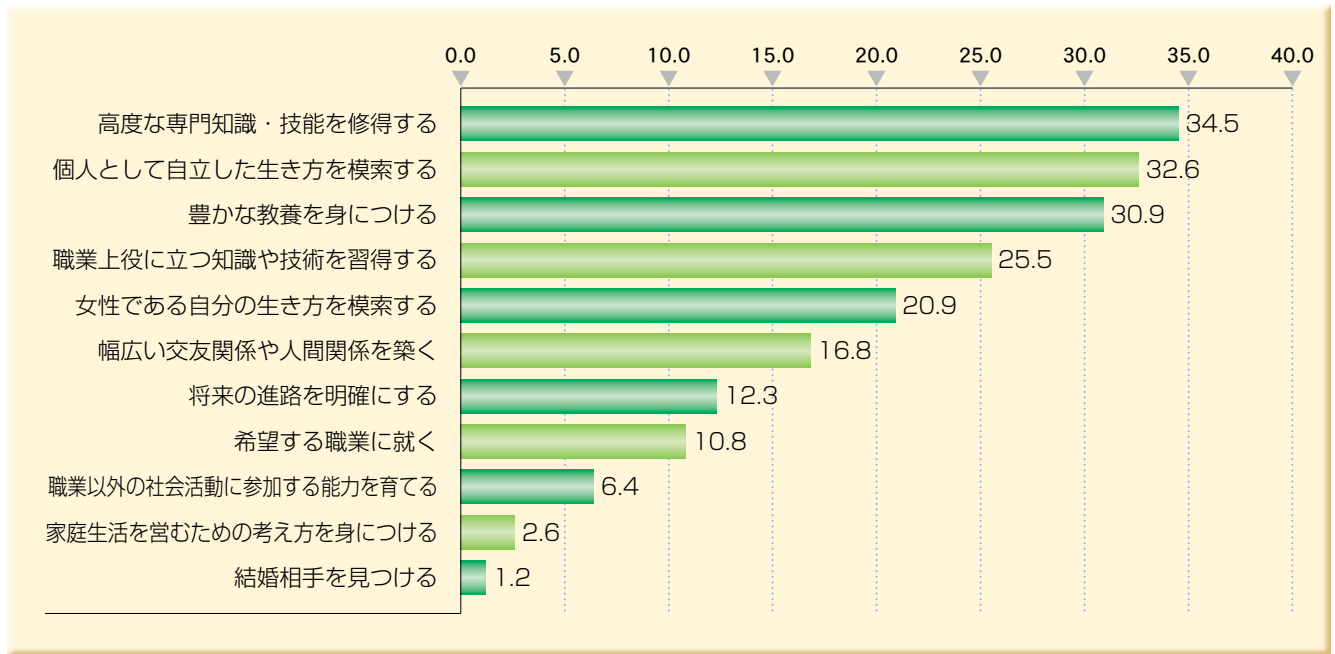
大学生生活に対する卒業生の評価はきわめて高い(「かなり評価できる」「ある程度評価できる」の合計は約9割)。評価の高さは大学生生活の充実感につながるゆえに大きな意味をもつ。総じて「豊かな教養」と「個人としての自立」の視点の獲得、「高度な専門的知識・技術」の習得という点での評価が高い。コーホートが若くなるほど、「職業的知識・技術」や「将来の進路の明確化」という点での評価が急速に低下してくるが、それは、大学教育と卒業後に就く職業との対応関係が薄れたことを示唆する。

大学生活で何を重視したか

[大学生活で何を重視したか] (1位+2位)

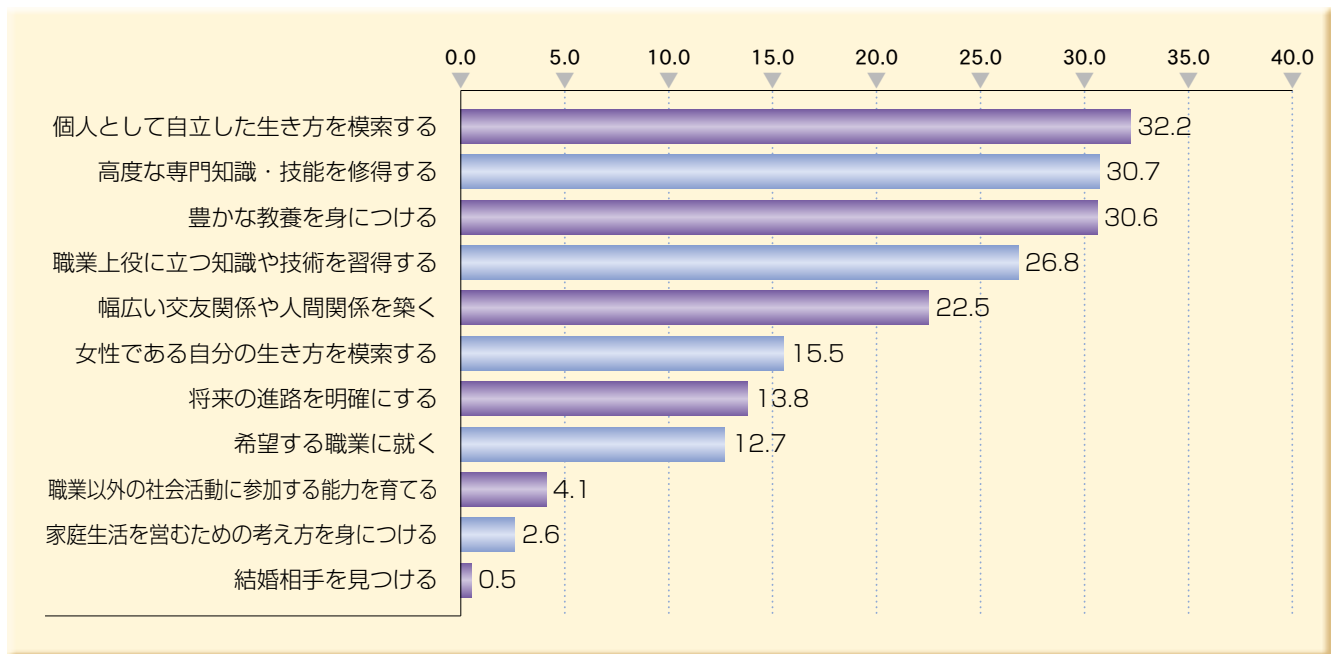
● お茶の水女子大学

(単位%)



● 奈良女子大学

(単位%)



卒業生による大学生活の評価は、なによりも彼女らが大学生活の何を重視し、何を期待したのかと関わってくる。もっとも重視されたのは、「高度な専門知識・技術」、「個人としての自立した生き方の模索」、「豊かな教養」である。1970年頃までの卒業生が「専門性」に裏打ちされた「職業」への姿勢を示すのに対して、それ以降になると、「教養」と「進路・生き方」探し、「交友・人間関係」などが大学生活の目的の中心を占めるようになる。

こうした職業志向を上回る教養志向や「進路・生き方」探しの高まりは、高等教育のマス化がもたらした学生の一般的な変化であり、両大学の卒業生に特有の傾向ではない。しかし、注目したいのは、高等教育のマス化は「専門性」志向を弱めるのが一般的だが、国立女子大学の場合、専門性志向は教養志向の高まりと共存している点である。

3

卒業後のライフコース

職業キャリア・家族キャリア・社会活動キャリア

大学卒業直後の進路

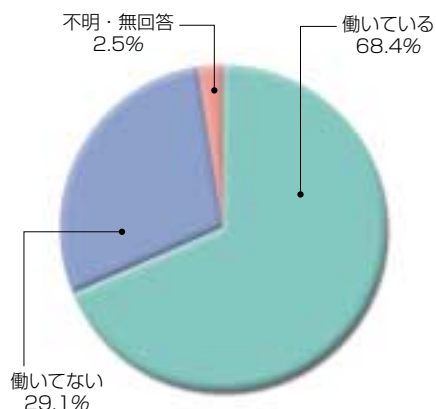
大学卒業直後の進路として、76%～81%が就業し、1割以上が大学院へ進学する。大学院への進学は年々ふえる傾向（1991～2000年コーホートでは2割を超える）にあり、この比率の高いことが特徴の一つといえる。

他の女子大学や共学大学出身女性と比べ、初職の職種として、専門・技術的職業が多い点、業種では教育・研究職が多い点、大企業と官公庁に勤務するものが多い点が、特徴である。

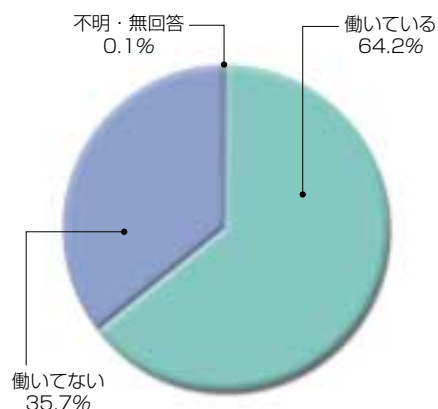
職業キャリア

[現在の就業]

お茶の水女子大学

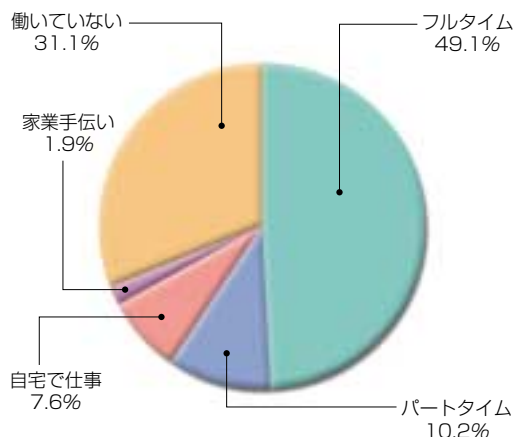


奈良女子大学

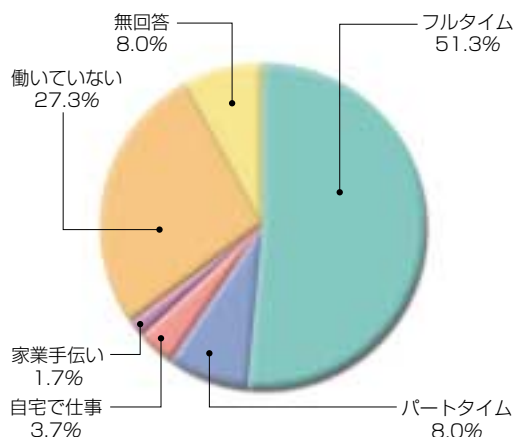


[30歳前後の就業状況]

お茶の水女子大学

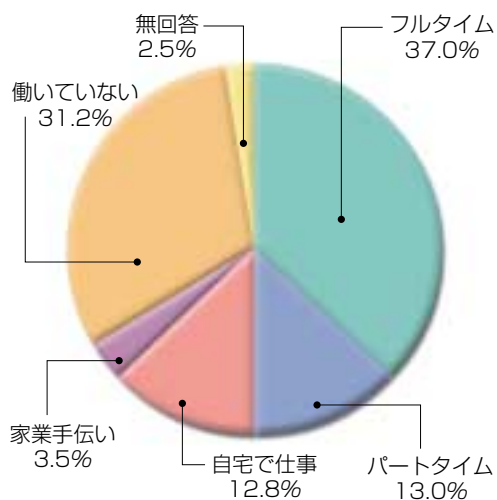


奈良女子大学

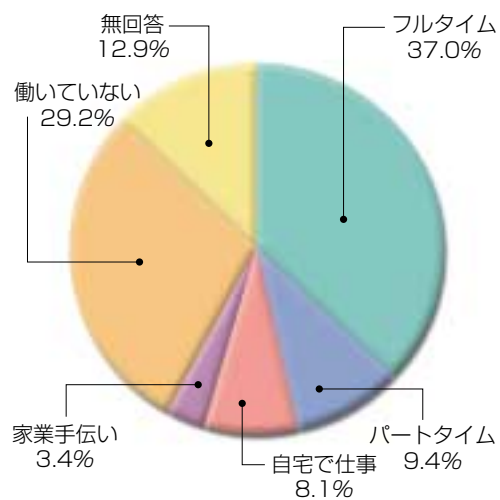


[35歳前後の就業状況]

● お茶の水女子大学



● 奈良女子大学



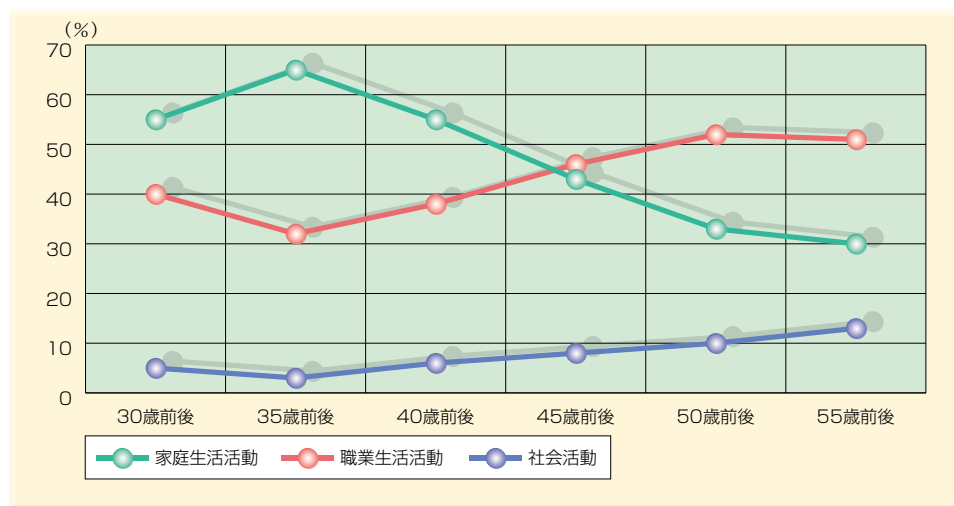
現在就業している卒業生は全体の65%前後（お茶の水女子大学68.4%、奈良女子大学64.3%）に達しており、そのうちフルタイム就業者の割合は59.1%（お茶の水女子大学）。現時点で無職のものは、お茶の水女子大学29.1%、奈良女子大学35.7%である。そのうち半数弱は再就業の可能性を有しており、現時点での就業状況の如何を問わず、「働く」ことを前提としたライフスタイルの選択が行われている。

特に、30歳以降の出産育児期においても就業率が高いままであるのが特徴である。勤務先業種として教育・研究職の占める比率の高さが子どもを育てながらの継続就業を可能にしている。出産育児期以降もフルタイム就業を続け、そうした職業キャリアが現在の高いフルタイム就業率をささえているといつてよい。

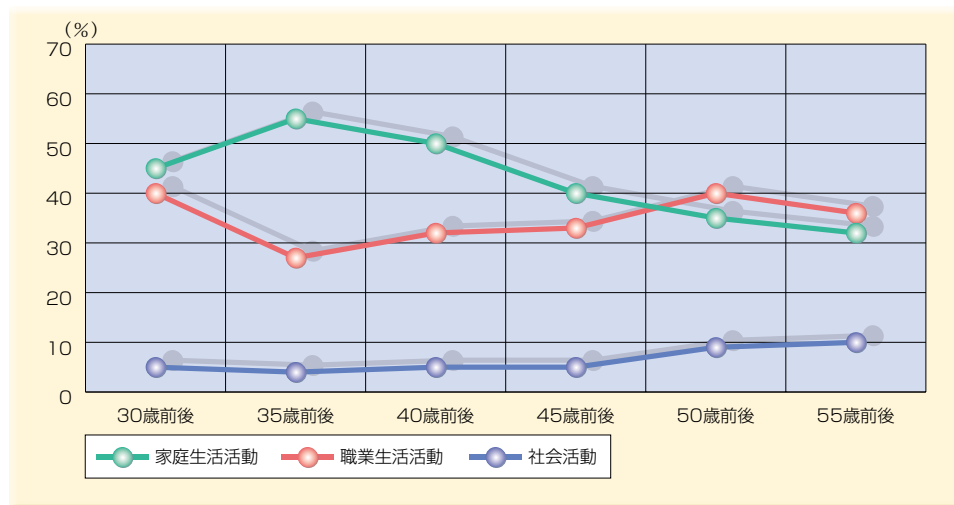


〔年齢段階別 もっとも重視して関わった活動〕

● お茶の水女子大学



● 奈良女子大学



卒業生の多くはそれぞれのライフコースを通して、家庭生活活動と職業生活活動を中心に複数の活動に関わっており、その時その時点でのライフステージで何を重視するかという価値観にもとづくライフスタイルを選択している。ライフコース上の晩婚化と晩産化がすすむなかで、活動の重心は、前半期（卒業後55歳までの間の）は家庭生活活動に、後半期は職業生活活動におかれている。収入の伴わない社会活動への積極的な参加も卒業生の特徴である。他の女子大学や共学大学出身の女性を対象にした調査の結果と比べても、より高い率の活動歴といってよい。

【コメント】

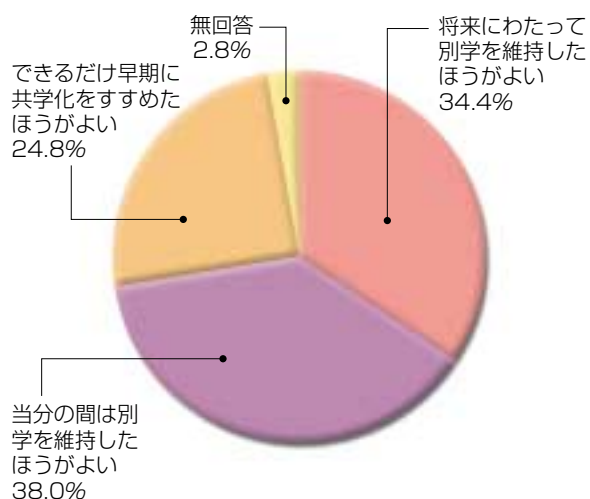
卒業生の職業キャリアの特徴として、初職への就業とともに、中高年期以降の就業率の確実な上昇による「就業継続力」があげられる。家族形成期を中心に、卒業生の多くが職業生活と家庭生活、さらには社会活動とのバランスを図る姿勢で、ライフスタイルを選択的に構成している。就業への意欲の持続が、就業の継続や復帰、再開につながっていると推測される。職業キャリアの獲得は、中断期における技術や能力の累積、就業への情報の獲得、働くための家族環境づくりの労なくしては見込まれないものである。

4 国立女子大学の将来像

別学維持か、共学化か

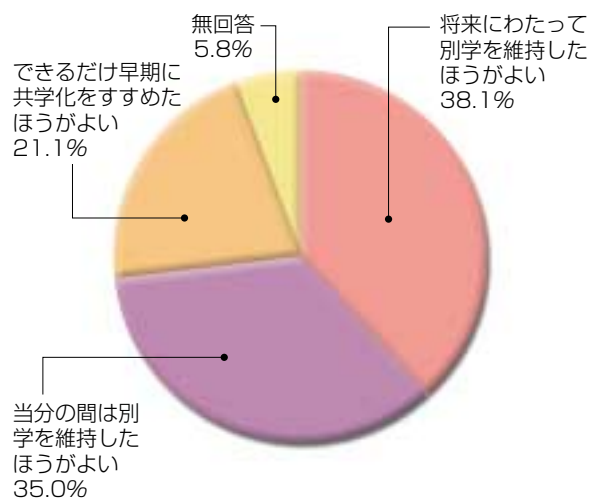
〔別学維持か、共学化か〕（学部）

● お茶の水女子大学



- 【お茶の水女子大学】
- ①当分の間は別学維持 38.0%
 - ②将来にわたって別学維持 34.4%
 - ③できるだけ早期に、共学化 24.8%

● 奈良女子大学



- 【奈良女子大学】
- ①将来にわたって別学維持 38.1%
 - ②当分の間は別学維持 35.0%
 - ③できるだけ早期に、共学化 21.1%

「当分の間別学維持」と「将来にわたって別学維持」を合計すると4人に3人近くに達する。早期に共学化をすすめるという選択肢は、少なくとも卒業生の声を聞く限り支持されてはいない。

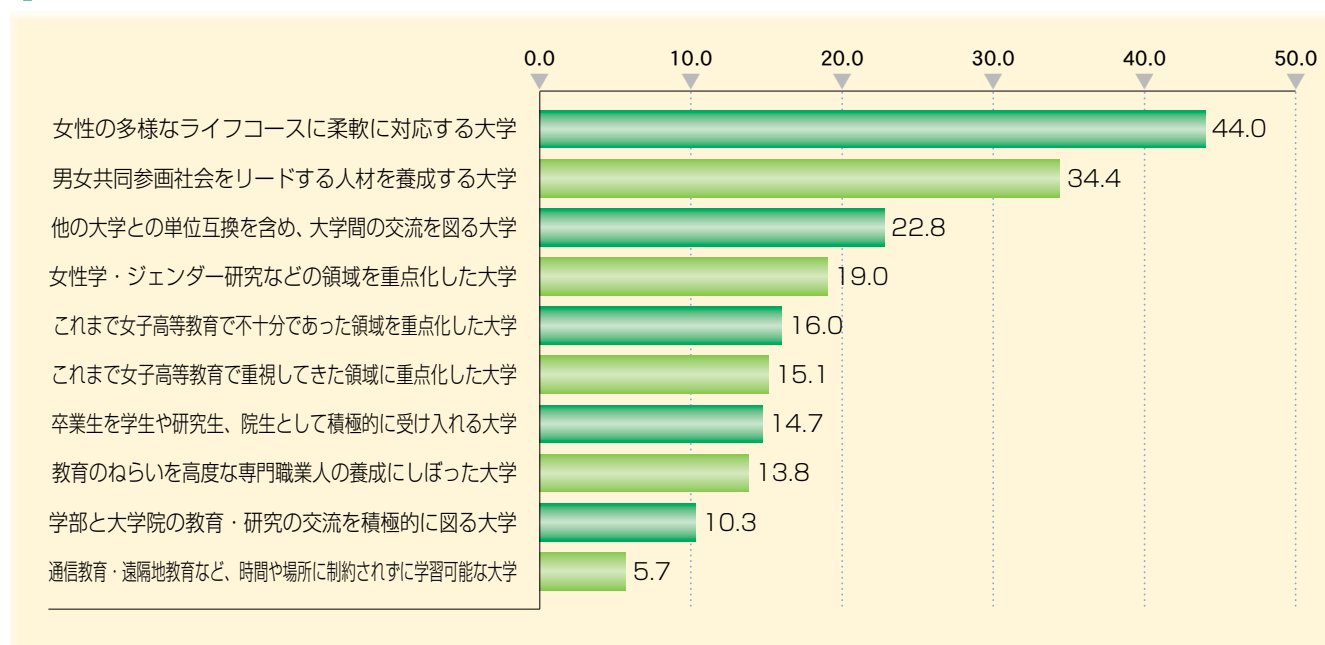
別学志向が強いのは、若いコーホート（とくに1991～2000年卒業者）である。このグループでは、「当分の間別学維持」と「将来にわたって別学維持」があわせて8割を超える。90年代以降女子の高等教育進学率が著しく上昇する中で、別学志向が縮小し共学志向が拡大したといわれるが、この結果は、今日の状況においてもなお、女子高等教育機関への社会的ニーズが存在することを教えている。

将 来 像

〔将来像〕（1位+2位）

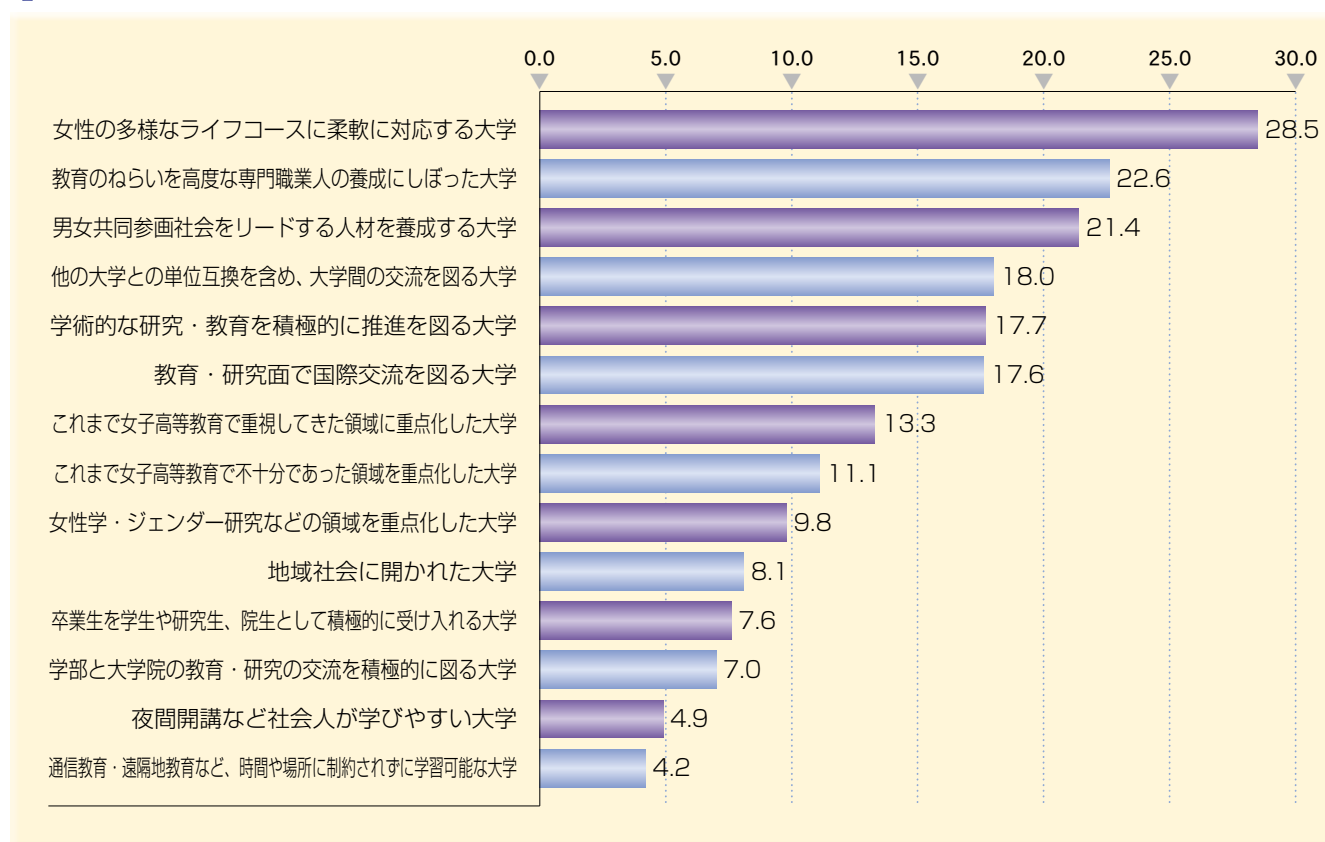
● お茶の水女子大学

（単位％）



● 奈良女子大学

（単位％）



【コメント】

国立女子大学はどのような方向性を重視すべきだと卒業生は考えているのだろうか。別学維持という基本的方向をふまえると、調査結果が示しているのは、次の2つの方向性の重視である。

①女性のための高等教育機関がこれまでもってきた特性を重点化する方向

具体的には、女子高等教育で重視されてきた領域（たとえば人文科学や生活科学）を重点化する方向と、女性学・ジェンダー研究などの領域を重視する方向である。この方向性の重視には、「女性の多様なライフコースに柔軟に対応する大学」づくりも伴って欲しいと、卒業生は考えている。この方向性を支持する卒業生は相対的に多く、とくに新しい卒業年グループで顕著である。

今後、学科課程・カリキュラムと、学び方・学生生活のスタイルの両面において、具体的方策を考える必要がある。

②高等教育への接近機会を拡大することによって学びやすい大学をつくっていく方向

たとえば「通信教育・遠隔地教育など時間や場所に制約されずに学習可能な大学」「卒業生を学生や研究生、院生として積極的に受け入れる大学」づくりなどが具体的に考えられる。

しかし、①で指摘された「女性の多様なライフコースに柔軟に対応する大学」づくりの方向性をあわせて考えてみると、重要なのは、何よりも多様なライフコースパターンをとる女性たちに、柔軟な学び方と学生生活のスタイルを可能とすることだろう。

両大学は設置以降女子のみを受け入れてきたにもかかわらず、必ずしもそのことを念頭においた学習環境を提供できていないわけではない。どのようなライフサイクルにあっても、学習が可能であるように、諸環境を整備していく方向が求められている。在学・在籍期間等の諸規定の見直し、子育てや家族の転勤といった、ライフイベントに配慮した学習方法の許容と学習の支援策などが、具体化される必要がある。



調査結果の概要Ⅱ

— 大学院修了生調査 —

1 大学院入学までの経路

入・進学者の学校歴

● お茶の水女子大学

▼入・進学者の学校歴

(単位%)

	学 部	修 士	博 士	割 合
博士課程修了・ 退学者	本 学	本 学	本 学	18.5
			本学以外	3.8
		本学以外	本 学	0.3
	本学以外	本 学	本 学	12.1
			本学以外	0.9
		本学以外	本 学	1.4
修士課程修了者	本 学	本 学	—	41.1
	本学以外	本 学	—	17.3
無 回 答				4.6
計				100.0(1127)

● 奈良女子大学

▼入・進学者の学校歴

(単位%)

	学 部	修 士	博 士	割 合
博士課程修了・ 退学者	本 学	本 学	本 学	8.6
			本学以外	5.3
		本学以外	本 学	0.1
	本学以外	本 学	本 学	3.5
			本学以外	2.6
		本学以外	本 学	0.3
修士課程修了者	本 学	本 学	—	63.9
	本学以外	本 学	—	14.6
無 回 答				1.1
計				100.0(1038)

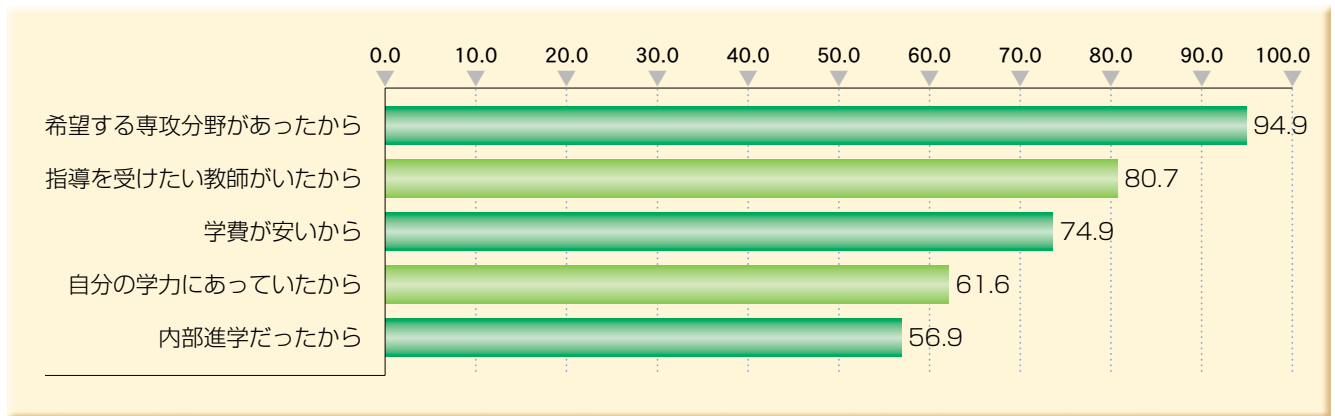
両大学の大学院は、他大学出身者をはじめ、卒業後何年かたって修士課程に進学するものを含め、幅広い年齢層、多様なキャリアや社会経験をもつ人びとを受け入れてきた。特記したいのは、内部進学者の8割が卒業後まっすぐ進学した院生であるのに対して、「卒業後しばらくして」の修士進学者のうち半数以上が他大学出身者である点だろう。両大学大学院は、大学卒業後再び学習しようとする他大学出身者に広く開放されてきた。

受験理由

〔受験理由〕（「かなりあてはまる」「ややあてはまる」と回答した者の割合）

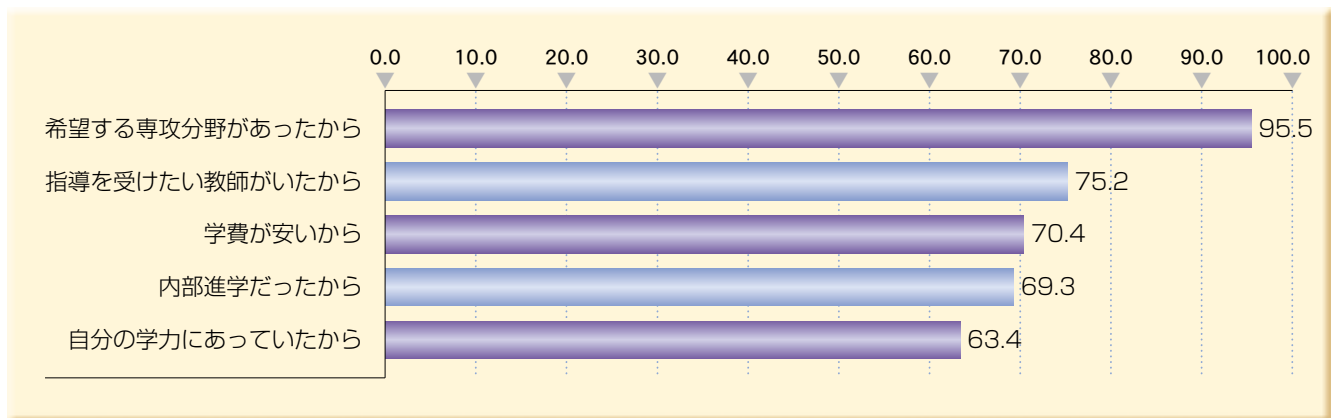
● お茶の水女子大学

（単位％）



● 奈良女子大学

（単位％）



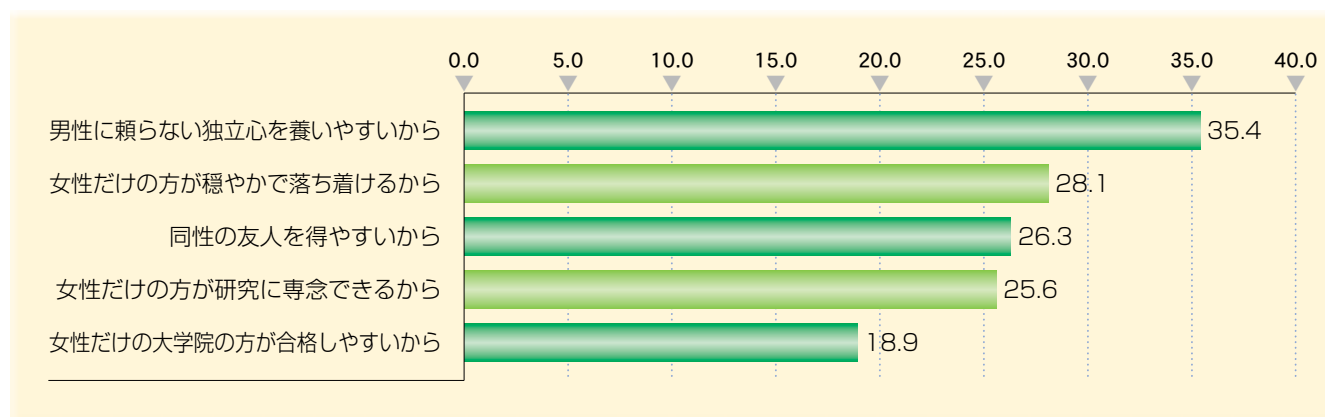
上位にあがっているのは、①「希望する専攻分野があったから」、②「指導を受けたい教師がいたから」、③「学費が安いから」。これに、{お茶の水女子大学}「自分の学力にあったから」「内部進学だから」「東京の都心部にあるから」、{奈良女子大学}「内部進学だから」「自分の学力にあったから」「国立大学は社会的評価が高いから」が続く。「女性研究者養成の実績がある大学だから」は約3～4割、「国立女子大学の大学院だから」は約3割である。

女性だけの大学院の受験理由

〔女性だけの大学院受験理由〕（「かなりあてはまる」「ややあてはまる」と回答した者の割合）

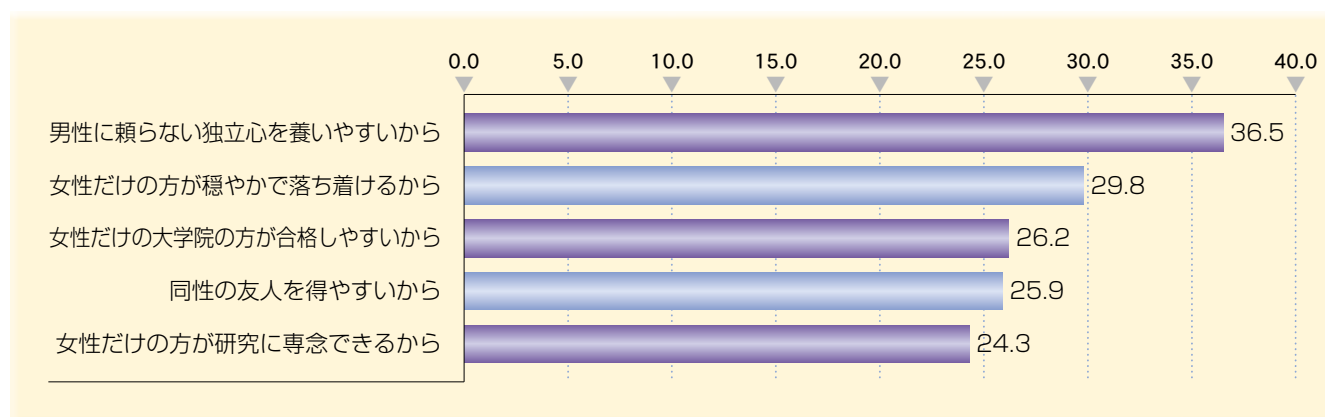
● お茶の水女子大学

（単位％）



● 奈良女子大学

（単位％）



調査結果の概要Ⅱ／大学院修士課程
1. 大学院入学までの経路

多い順に、「男性に頼らない独立心を養いやすいから」「女性だけのほうが穏やかで落ち着けるから」となる。「同性の友人を得やすいから」「女性だけのほうが研究に専念できるから」も2割以上の支持を得ている。

進学動機

修士課程では「もっと勉強がしたかったから」が、博士課程では「研究者になりたいから」が、それぞれ過半数を占めている。修士課程ではもっとも若いコーホートで、「なりたい職業につくためには修士の学位が必要だったから」が増加している。

【コメント】

大学卒業後一定期間をおいて修士課程の進学をめざす女性にとって、幅広い年齢層による院生構成や、多様なキャリアをもつ同性の存在という教育環境が、進学の際の心理的障壁を低めるうえで役立っている。従来型の研究者養成の機能を重視しながら、一方でカルチャーセンター化やサロン化ではない方向で、「もっと勉強したい」という女性たちの学習意欲をどう汲み取っていくのか。より開かれた学習機会の提供か、研究者養成に焦点化していくのか、研究者養成にシボるなら、どの専門領域に特化していくのか。それは、大学院の方向性とかかわって最大の課題となるだろう。

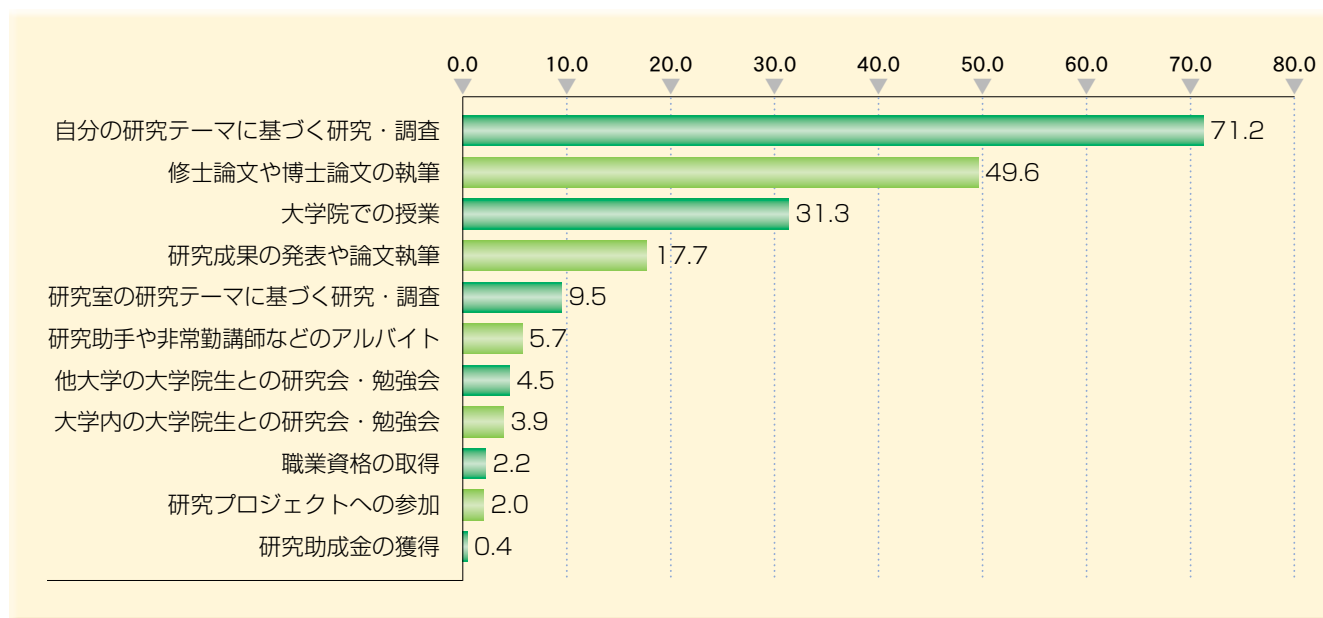
2 大学院生活の評価

在学中、力をいれたこと

[在学中、力を入れたこと] (1位+2位)

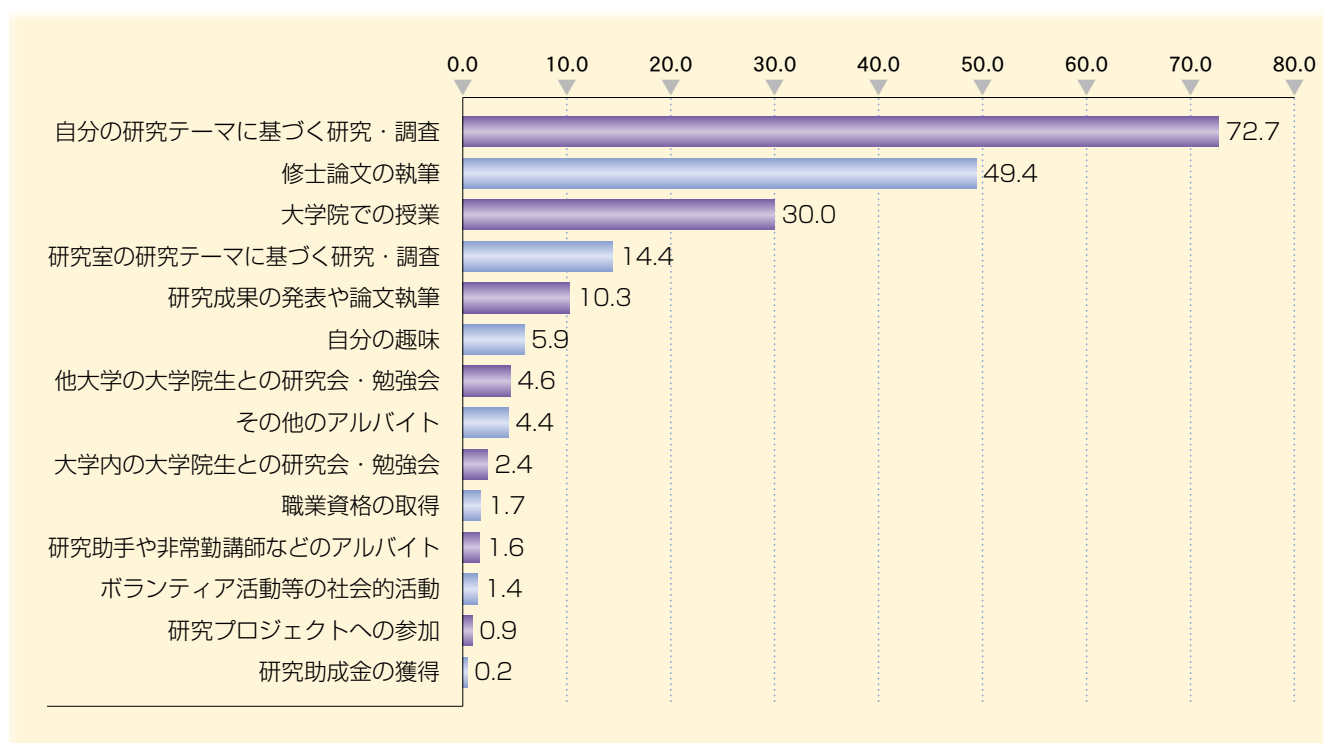
● お茶の水女子大学

(単位%)



● 奈良女子大学 (博士前期(修士)課程について)

(単位%)

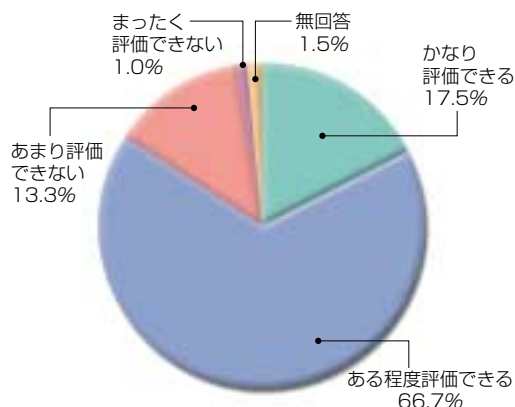


在学中の生活において力を入れたものとして上位にあるのは、①「自分の研究テーマに基づく研究・調査」、②「修士論文や博士論文の執筆」、③「大学院での授業」である。

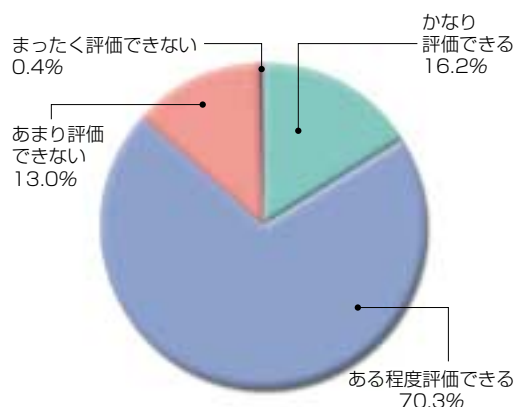
大学院生活の評価

〔総合的にみて…大学院生活の評価〕

● お茶の水女子大学



● 奈良女子大学

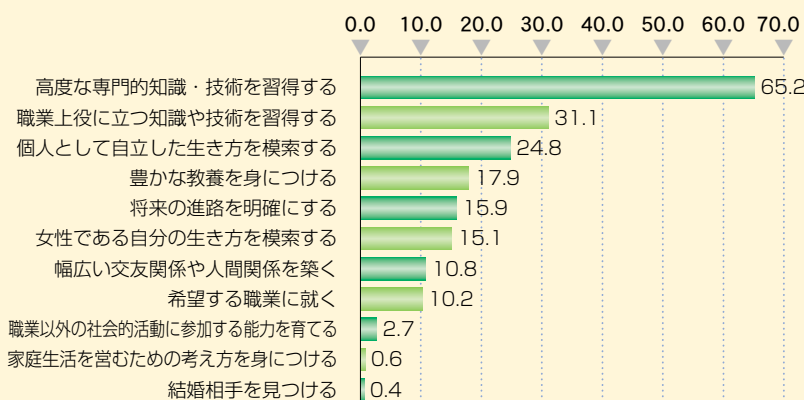


(注) 無回答者を除外した結果

〔大学院生活の評価〕 (1位+2位)

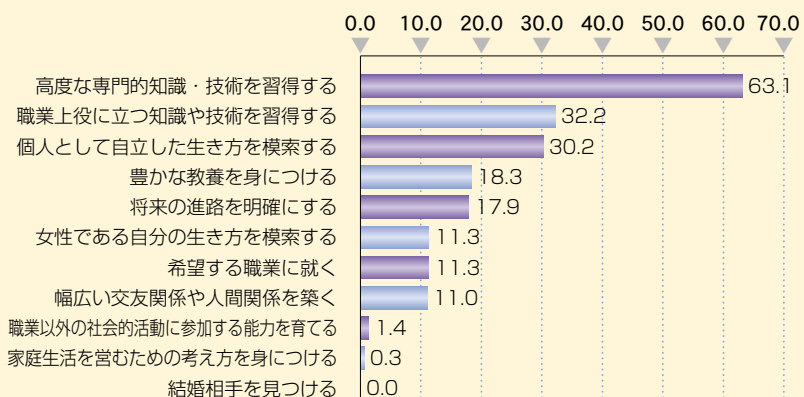
● お茶の水女子大学

(単位%)



● 奈良女子大学

(単位%)



全体として、高い専門性、個人としての自立の視点の獲得、職業的知識・技術の習得という3つの点で、修了生に良好な教育環境を提供し、一定の評価を受けている。それは、総合的評価において、消極的評価は約15%と著しく小さく、8割強がプラスの評価をしていることから裏づけられる。その評価も内部進学者より他大学出身者に、「卒業直後」より「卒業しばらくして」の進学者に、さらには教師の影響を強く受けた院生に、より高い。

【コメント】

大学院生活に求めるものが、大学院在籍者数が急速にふえてくる1990年前後から多様化し、以下の3つのタイプの共存状況が生まれている。

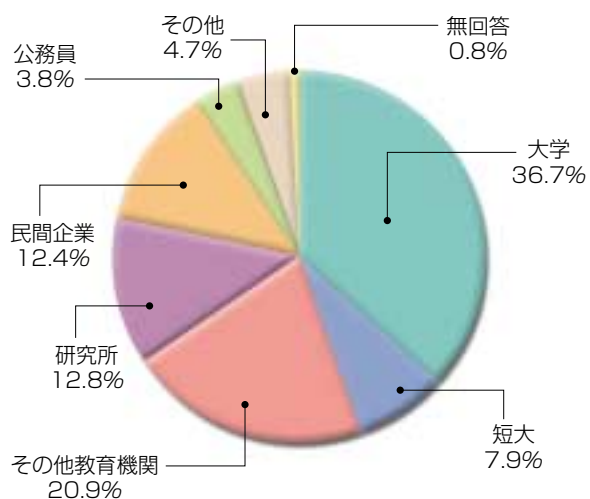
- ①研究者や高度専門職を志望し、専門教育への強い志向をもつ従来型の院生（その多くは大学卒業後まっすぐ進学してくる内部進学者）
- ②キャリアアップを求め、「職業」教育への志向を強める院生（その多くは卒業後何年かたって進学してくる他大学出身者）。
- ③次のステップに踏み出すための「教養」と「進路・生き方探し」を求める院生（その多くは1990年前後から大学院への進学を果たした内部進学者）

3 修了・退学後の職業キャリア

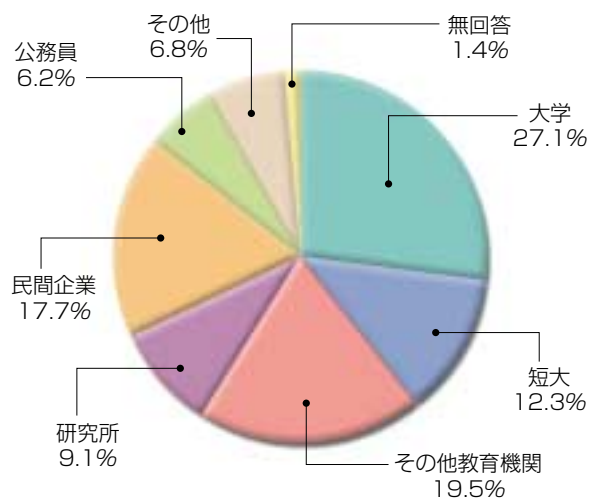
修了・退学後の就業形態

[現在の勤務先]

● お茶の水女子大学

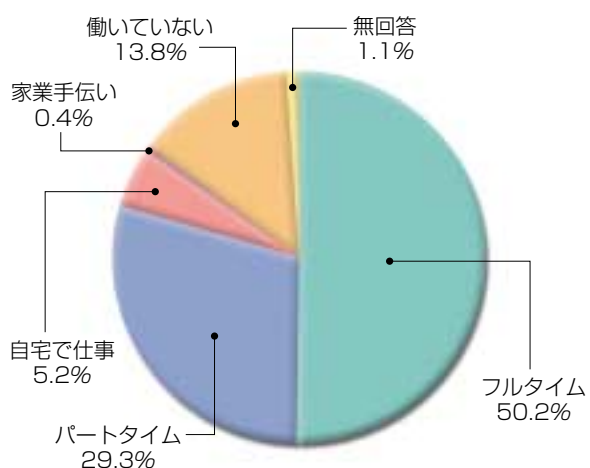


● 奈良女子大学

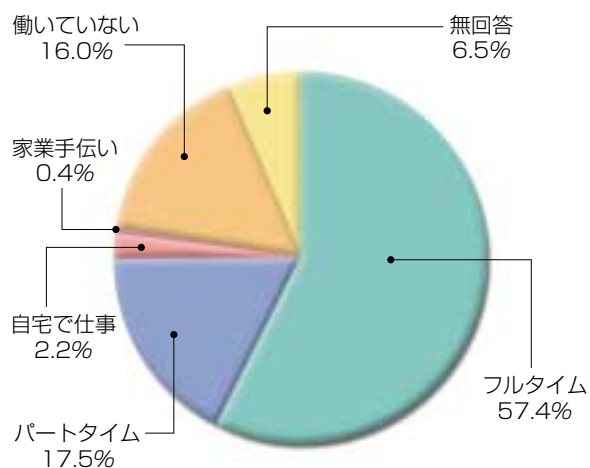


[30歳前後の就業状況]

● お茶の水女子大学

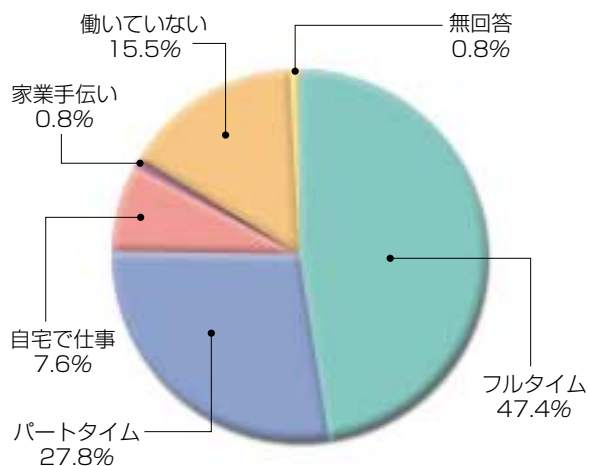


● 奈良女子大学

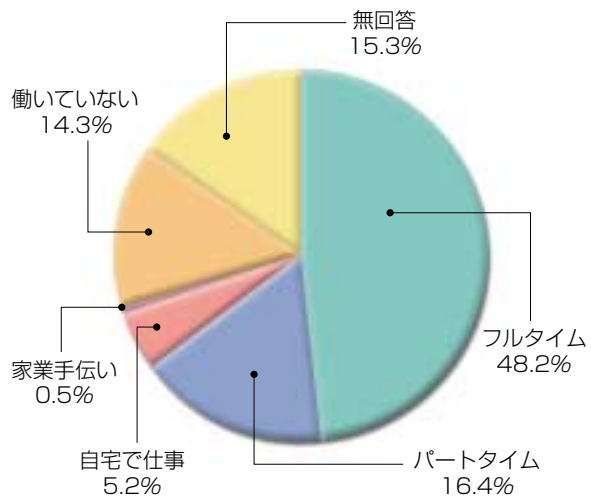


[35歳前後の就業状況]

● お茶の水女子大学



● 奈良女子大学



現在就業している修了生は全体の8割強（お茶の水女子大学84.6%、奈良女子大学83.2%）に達しており、そのうちフルタイム就業者は66.5%（お茶の水女子大学）を占める。

特に勤務先として大学関係（お茶の水女子大学36.7%、奈良女子大学27.1%）、短大関係（同7.9%、12.3%）が多く、あわせて4～5割が高等教育機関に勤めている。

また、出産育児期以降の就業率は学部をさらに上回り、30代もほぼ半数がフルタイム勤務をしている。

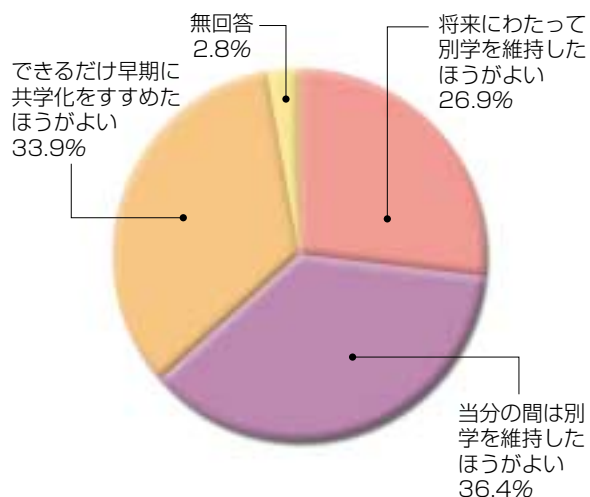


4 大学院の将来像

別学維持か、共学化か

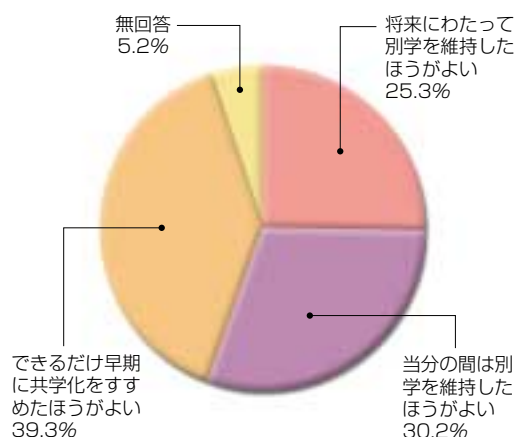
● お茶の水女子大学

[大学院全体について]

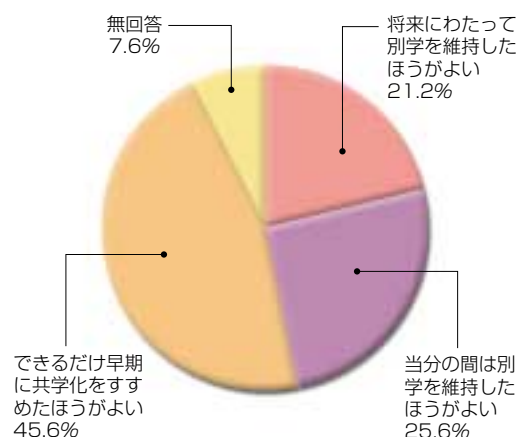


● 奈良女子大学

[修士課程について]



[博士課程について]



大学院を、共学化すべきか、別学を維持すべきか。

{お茶の水女子大学} 「当分の間別学維持」が36.4%と最も多く、「早期に共学化」が33.9%でこれに次ぐ。「将来にわたって別学維持」は26.9%である。「当分の間」と「将来にわたって」の別学維持を合計すると6割をこえる。

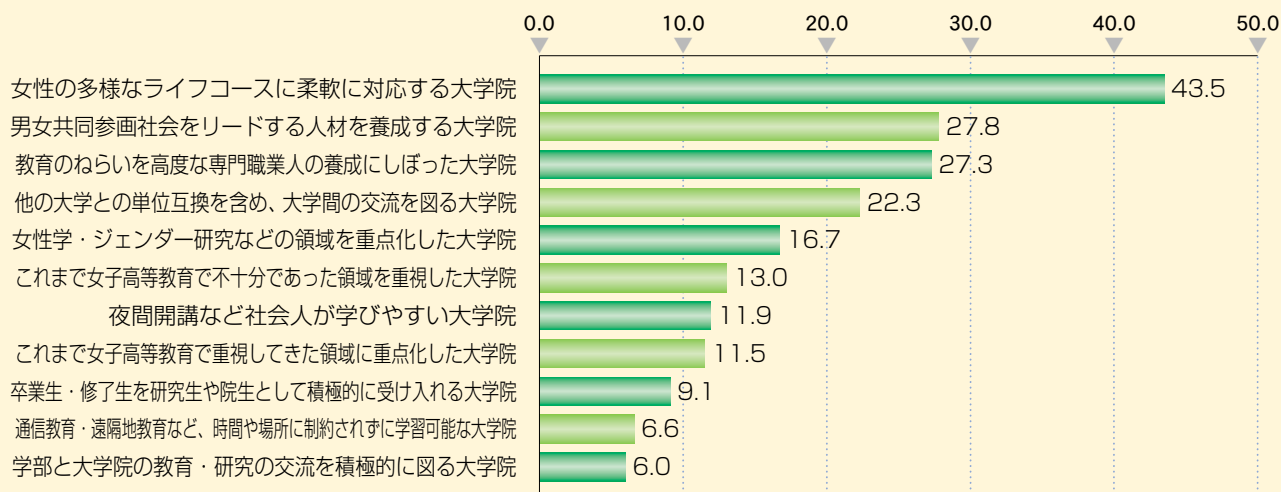
{奈良女子大学} 博士前期課程については、「早期に共学化」が39.3%と最も多く、「当分の間別学維持」30.2%、「将来にわたって別学維持」25.3%がこれに続き、別学維持を合計すると55.5%となる。博士後期課程については、「早期に共学化」45.6%、「当分の間別学維持」25.6%、「将来にわたって別学維持」21.2%となり、別学維持を合わせると46.8%で、博士前期課程より共学化が多くなる。

大学院の将来像

〔大学院の将来像〕（1位+2位）

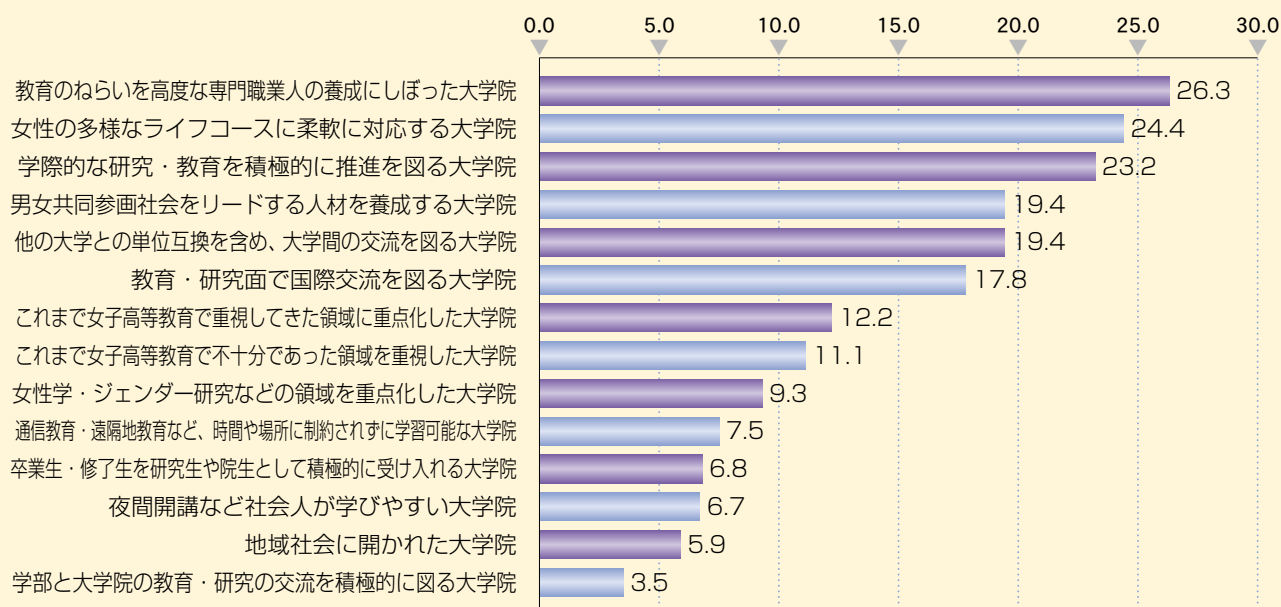
● お茶の水女子大学

（単位％）



● 奈良女子大学

（単位％）



【お茶の水女子大学】

- ①女性の多様なライフコースに柔軟に対応する大学院
- ②他大学院との単位互換を含め、大学間の交流を図る大学院
- ③男女共同参画社会をリードする人材を養成する大学院
- ④教育のねらいを高度な専門職業人の養成にしぼった大学院

【奈良女子大学】

- ①他大学院との単位互換を含め、大学間の交流を図る大学院
- ②学際的な研究・教育を推進する大学院
- ③女性の多様なライフコースに柔軟に対応する大学院
- ④研究・教育面で国際交流を図る大学院

これらは、多少の順位の相違があるものの、学部卒業生に尋ねた将来像と概ね一致している。ただし、「教育のねらいを高度な専門職業人の養成にしぼった大学（院）」に関しては、大学院で重視すべきとする回答が格段に多い。高度な専門職業人養成の場としての大学院への期待が窺われる。

本概要は、「卒業生・修了生のライフコースと国立女子大学の将来像に関する調査」の各報告書から要約・抜粋したものです。

平成13年12月

卒業生・修了生のライフコースと 国立女子大学の将来像に関する調査(概要)

編集・発行 **お茶の水女子大学企画広報室**
〒112-8610 東京都文京区大塚2丁目1番1号
TEL 03-5978-5105
<http://www.ocha.ac.jp/>

奈良女子大学総務課大学改革推進室
〒630-8506 奈良県奈良市北魚屋東町
TEL 0742-20-3220
<http://www.nara-wu.ac.jp>

制 作 三鈴印刷株式会社
